（別紙4）　　令和　3　年度

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要（事業所記入）】(3ユニット／1ユニット)

事業所番号	2775802214		
法人名	有限会社　永世会		
事業所名	グループホーム成寿苑		
所在地	大阪市平野区平野東4丁目7-25		
自己評価作成日	令和4年3月10日	評価結果市町村受理日	令和4年4月22日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。（↓このURLをクリック）

基本情報リンク先	

【評価機関概要（評価機関記入）】

評価機関名	特定非営利活動法人ニッポン・アクティブライフ・クラブ　ナルク福祉調査センター
所在地	大阪市中央区常盤町２－１－８　FGビル大阪　4階
訪問調査日	令和4年3月31日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点（事業所記入）】

【理　念】
・できる事は自分でやります
・私は私も大切だけど
共同で生活しています
・笑ってばかりいられない
怒る時も泣く時もあります
・社会の中の地域で暮らします
・私にとっての『普通の暮らし』
・できない事は協力します
・迷う事あっても大丈夫
まかせてください
・「いってらっしゃい」「おかえりなさい」
いつも笑顔で
・人生の先輩
教えて頂く事たくさんあります
・成寿苑には『あなた』が必要

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点（評価機関記入）】

有限会社永世会が平成18年3月1日に当事業所を設立して16年を経ている。事業所理念は13年前に職員全員の意見を取り入れて改正し、職員と利用者が理念の唱和を一緒に行い共有している。理念唱和で「大きく口を開けて声を出す」ことは良い機能訓練に繋がっている。理念は利用者にも浸透し、「できることは自分でしますよ」と、食事の準備・配膳・拭き掃除などを役割分担し、食前の口腔体操や散歩・イベントなどの生活リハビリや、利用者個々のやりたいこと、趣味などを尊重し支援している。コロナ禍で外出やイベントは自粛中だが、事業所周辺の清掃活動は継続している。代表者・管理者は認知症ケア専門士資格を有し、地域のネットワークや認知症協会の研修会・勉強会に参加している。皆で研鑽を積み、質の向上に取り組んでいる事業所である。

Ⅴ．サービスの成果に関する項目（アウトカム項目）　※項目№1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

	項　目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる（参考項目：23,24,25）		1. ほぼ全ての利用者の
		○	2. 利用者の2/3くらいの
			3. 利用者の1/3くらいの
			4. ほとんど掴んでいない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある（参考項目：18,38）	○	1. 毎日ある
			2. 数日に1回程度ある
			3. たまにある
			4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている（参考項目：38）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている（参考項目：36,37）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている（参考項目：49）		1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
		○	4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている（参考項目：30,31）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
62	利用者は、その時々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている（参考項目：28）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない

	項　目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている（参考項目：9,10,19）		1. ほぼ全ての家族と
			2. 家族の2/3くらいと
		○	3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんどできていない
64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている（参考項目：2,20）		1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度
		○	3. たまに
			4. ほとんどない
65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている（参考項目：4）		1. 大いに増えている
			2. 少しずつ増えている
		○	3. あまり増えていない
			4. 全くいない
66	職員は、活き活きと働けている（参考項目：11,12）		1. ほぼ全ての職員が
		○	2. 職員の2/3くらいが
			3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 家族等の2/3くらいが
			3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどできていない

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、（Altキー）＋（Enterキー）です。〕

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅰ.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	身近な思いを表し掲げている。毎朝全員で唱和、「その方にとっての普通のくらし」の実践に向けて常に意識し取組んでいる。入居者と共に唱和することで成寿苑で暮らす意識付けを促している	事業所理念を玄関・事務所・各ユニットフロアに掲示して、職員は申し送り時に唱和し、各ユニットでも利用者と一緒に唱和している。毎月の職員会議で「利用者が主体である」ことを確認・共有し、新人研修や日々のケアの中で互いに確認しながら実践している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	事業所自体が地域交流の機会を多く持ち、地域のネットワークに積極的に参加している。 地域清掃のボランティアを入居者と共に活動し、コロナ禍においても地域との繋がりを大切にしている。	自治会の回覧板や地域のネットワークで情報収集ができ、地域の職員も多く、学校情報も父兄から入る。ボランティアや、中学生職業体験・看護師実習生の受け入れ、事業所での中学の吹奏楽部の演奏会など、全てコロナ禍で中断している。利用者と職員で毎週木曜日に事業所前の道路と川沿いを掃除することは継続している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	他事業所の人材育成のための実習生、研修生受け入れ、認知症キャラバンメイト登録、地域中学校の職業体験の授業やボランティア活動の受入れを通して地域に貢献できる様に心掛けている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	家族や外部のお客様に入居者様の表情に会って頂き、イベントそのものを会議の場とすることを主に考えてきたので、コロナ禍において開催タイミングがずれている。 コロナの収束と共に再開したい。	以前はメンバーが参加して会議を開催していたが、コロナ禍後は書面開催で、活動報告書を包括支援センターと一部の家族に送付している。議事録は玄関に置いて開示している。会議メンバーも高齢化などの要因があり、家族の参加促進と推進会議メンバーの再編成を図っている。会議日を定例化し、次回は5月に開催予定である。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	近隣地区との勉強会など複数のネットワークに参加しており、大阪市の取り組みにおけるご担当者とのお顔合わせの機会も多い。あらゆる面から連携に努めている。	介護保険関連書類の提出などで保健福祉課・生活支援課と連携し、包括支援センターには、事業所の運営報告や利用者の受け入れなどを常に連絡・相談している。「平野区よいよいネット」やケアマネ協会・大阪府グループホーム協会に参加し、ズームやネットで情報収集や勉強会を行っている。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	入職時をはじめ、身体拘束等の適正化委員会の定期的開催にて意見や改善点の話し合いを重ねている。 どういった状況が拘束に値するのか？疑問があれば随時話合える体制作りに努めている。	身体拘束適正化指針を基に、毎月の会議（全員参加）や3ヶ月毎の委員会と勉強会（議事録と勉強会資料を配付）、年2回以上の研修会で、職員に周知徹底している。玄関は安全のため施錠しているが、ユニット間は行き来でき、ベランダにも自由に出られる。言葉掛けで気になる場合があれば、職員間で互いに注意し合っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	入職時はじめ、定期的及び随時の研修にて周知徹底し理解と意識付けを行っている。今期、委員会発足し、不適切なケアを含めて身体拘束等の適正化とを関連付けて考える機会にもなっている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	制度の利用が必要な方には申し立てまでの手続きを支援している。制度についても積極的に学ぼうと努め、活用に向けての選択肢としても提示できる様に努めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に、重要事項の説明と共に事業所の方針とケアへの取り組み、起こりうるリスクについて、入居者と家族、事業所との共通認識となるように詳しく説明し同意を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	普段のご様子から思いを察し、入居者の立場に立ったケアができる様務めている。 家族のご来苑時、お話しできる時間を作り、又、ご意見が出しやすい様に、玄関先に『ご意見箱』を設置している。	以前は、家族からの申し出でがあったフラダンスの披露や、庭に実った柿の収穫に応じていたが、コロナ禍で全て自粛している。直接の面会も困難であり、可能な家族にメール・ライン・写真メールなどで利用者の様子を伝えているが、今回の家族アンケートには「月1回でも生活の様子を知らせて欲しい」との心配・不安の気持ちが記載されている。	年2回の成寿苑通信とホームページのブログで利用者の様子を伝えているが電話での連絡・連携は家族の年齢・状況により様々である。コロナ終息が不透明な中で、家族の要望を尊重し、日頃の生活の様子やイベント・誕生会などの笑顔の写真と、担当職員によるコメントを添えて個別便りを送付することを期待する。

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	代表者は職員と関わる時間を大切にし、気さくな間柄で信頼関係を築いている。普段の何気ない会話の中から意見や提案・要望を聞き出せるよう心掛け、働く意欲向上に繋がる様に努力している。	毎月第3木曜日（常勤）・第4木曜日（非常勤）の会議で意見・要望を聴き、自己評価表を用いた年1回の個別面談でも聞いている。申し送り時や日常でも、気軽に意見が言える雰囲気にある。意見に沿って、調理時と食事介助時にフェイスシールドを早くから使用し、利用者が喜ぶイベントを各ユニットで考えて競っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	資格取得に向けた支援を行い、能力に合った昇給を実施。毎月、勤務形態の希望が申告できるシステムで、個々の都合が通りやすい環境。本人が希望する休みは叶えられる様に最大限に協力している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	苑内研修にて知識共有と日々のケアに繋げていける様、毎月、その時期に必要な事項を研修内容に検討・実施している。日々の介護記録にセンター方式を取り入れ、認知症介護のOJTを実施している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	G/H協会はじめ複数ネットワークに加入。職員育成に向けて、実践に活かせる活動となっており、勉強会、他事業所間・他事業所現場スタッフ同士の交流と意見交換の場にも積極的に参加している。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	現住まいを訪問し、生活の様子を伺っている。使い慣れた家具を持ち込み、馴染みが再現できる環境作りを心掛けている。 ショートステイから開始し、安心して本入居に至れるよう提案できる。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の要望や困り事が当苑を選定することによりの解決可能かも考えすすめている。 家族との連携が不可欠なので、不安の解消は重要。初期にご本人を知る為の聴取にご協力をお願いしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ご相談を受けた際、ご本人とご家族の真のニーズと、当サービス・当苑を利用されることが適切であるのかを照らし合わせてお話を進めていく様に心掛けている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の生活歴、人生観に触れ、『人生の先輩教えていただくことたくさんあります』理念通り、この様な場面が多くある。常に主体性は本人であることを念頭に置き、信頼関係を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	入居者の様子や状況の変化についてありのままの状況を伝え、家族に対して必要な協力を得られるように事前に報告している。 お互いの『家族を想う気持ち』を大切にし、家族の役割を支援している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族はじめ、関わりがあった方へ季節の便りにて現状の報告をしている。 馴染みの美容室に通ったり、定期的な一時帰宅、地元の祭りに参加など、 個々の人間関係や習慣が継続出来る支援をしている。	コロナ禍で減少しているが、職員が利用者に同行して馴染みのパン屋や美容室に行っている。家族からの電話や家族・友人への電話を取り継ぎ、海外の娘さんとのテレビ電話を支援している。携帯電話で写真やメール・ラインを家族に送信し、利用者の写真付き年賀状を、以前のデイサービスセンターやケアマネジャーに出すのを支援している。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	気の合った入居者同士で過ごせる様にハード面での工夫と場面作りに努め、それを遠くから見守る姿勢を実践している。 ティタイム・食事を職員も共にし、入居者間の会話を持てるよう支援している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	ご転居先を訪ねたり、お見舞いに伺ったり、可能であれば苑内のイベントにお誘いしたりとご本人にとって、前居であった歴史と繋がりを大切に考えている。		
Ⅲ．その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	（9）	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の関わりの中でその時々の表情や言葉を聴き、意向を汲み取る様に努めている。 介護記録にセンター方式を活用してご本人の言葉に隠された想いに寄添うことを大切にしている。	入居時のフェイスシートやセンター方式の「その人像」を参考にし、利用者に寄り添いながら対話を大切にして思い・意向の把握に努めており、困難な人もその時々の表情や行動を良く観て対応している。「帰りたい」と繰り返す人には、一緒に外を散歩して気分転換したり、終末期の人が「たこ焼きが食べたい」と、目の前で作っているのを見ながら自分で食べることを叶えた。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人にとっての『普通の暮らし』を継続していただける様、本人のこだわりや嗜好品の把握に努めている。本人の語れる機会を大切にし、申し送りノートを活用しながら伝え共有している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	全職員が一人ひとりの生活リズムを把握できる様に努めている。日々の申し送りの中で身体面や病状の変化、精神的変調を伝え合い、経過を追いながら情報の交換と共有に努め、ケアをすすめている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	センター方式を活用した情報を元に、本人の思いに沿った課題をカンファレンスで意見交換、本人を主体にした介護計画を立案。即時解決が必要な事を毎月のモニタリングで表面化させている。	入居時に聞いた利用者・家族の意見・要望や、アセスメントした意向を基に、介護計画を作成している。毎月モニタリングを行い、定期的なカンファレンスで情報収集し、担当者会議を行って介護計画を更新している。利用者の状況・状態変化時は、その都度関係者と話し合って介護計画の変更を行い、家族の了承を得て再交付している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	センター方式を活用し、言葉、行動の変化など一日を通した感情の揺れの理解に努めている。この日々の情報を元にカンファレンス、本人を主体にした介護計画が立案され、ケアに反映させている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々に生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	個々の生活背景を柔軟に支援している。一家の主婦として、妻として父としての役割が果たせるように支援している。 その瞬間に感じた行動を制限しない支援に重点を置いて実践に努めている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍で地域参加ができずにいる現状である。 苑周辺の清掃を入居者と行うことを続けており、地域の一員である自覚を支援している。 コロナ収束に向けて、地域資源活用の充実を取り戻したい。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	医療機関との24時間医療連携体制が整っている。 苑職員のそれぞれの役割に従い、必要な医療が適切に支援できる体制を整え取り組んでいる。	利用者全員が協力医療機関をかかりつけ医とし、内科の訪問診療を月2回受け、ほぼ全員が週1回の歯科・歯科衛生士の訪問診療を受けている。事業所で鍼灸院のマッサージを週3回受ける人もいる。神経内科・眼科・皮膚科には職員が同行して受診し、結果は家族に知らせ、医師からかかりつけ医に文書で報告して共有している。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	2回/週、訪問看護師が来てくれる中、職員との連絡・連携にて日常の生活状況を把握、健康管理とアドバイスをしてくれる。 夜間のオンコール対応と緊急時の医師への連携なども担っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院の際には速やかに日常生活の状況が判る情報書類を提供し、生活歴など解り易く伝えられるよう努力している。 入院先では担って頂けない事柄に関しては連携の下できる限りの協力をしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居の契約時に重度化及び終末期ケアの指針を示している。 終末期だけでなく、病状の変化時には、主治医からの病状説明の機会を作り、本人を含めた各関係者が想いの共有に努め、方針立てている。	入居時に重度化と看取りに関する各指針を利用者・家族に渡して説明し、重要事項説明書にも記載して同意を得ている。重度化した時は医師から対応の説明をし、医師・事業所が家族の同意書を得ている。「高齢者の看取りの原則」マニュアルを作成し、都度研修して職員に周知し、過去10名近くを看取り、事業所で葬儀をしたことも何例かある。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	AEDの備えあり。緊急マニュアルがある。 緊急時の連絡体制を整備している。 管理者は赤十字救急法救急員の有資格。 今期、全職員、普通救命講習を受講済み。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防災委員会を設置し、あらゆる自然災害を想定して、毎月1日に防災訓練を実施している。	「災害対応マニュアル」を作成し、ほとんど夜間想定で利用者も参加して避難訓練を実施していたが、今年度は教養型訓練とし、職員は研修記録を提出して書類での確認をした。毎月1日を「防災の日」とし、様々な災害を想定して全員参加で訓練し、昼食は非常食を摂った。ほぼ全職員が近くに住んで直ぐに駆け付けられ、3日分の水・食料を備蓄している。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅳ．その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	理念通り、個々を大切に支援している。 言葉かけや言葉使い、口調にも配慮しながら関っている。 定期的な尊厳の研修実施にて意識向上を図っており、個人の誇りや尊厳を守るべく関わっている。	全国認知症グループホーム協会の「コンプライアンスルール」を用意し、年2回以上研修を行って職員に周知している。風呂から部屋へ帰る時はバスローブを着る、利用者に「ありがとう」の言葉で感謝を表す、利用者が大切にしている仏壇にお祈りして入室する、などに留意している。不適切な対応があれば、職員同士で注意し直している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	主体は本人であることを念頭に、何か行動する際には本人のご意見を聞くように努めている。 表情での汲み取りに努め、本人が選べる環境を整えて自己決定できる場面を多く持っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	個別性を重視、生活歴を尊重しながら共同生活を営める様に支援している。 入浴の時間や順番、食事内容の変更などの希望、睡眠や排泄リズム、年齢や個々の体力に合わせた1日を支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	男性は毎日の髭剃り声かけ、身だしなみの支援を実施。 女性であれば、外出時に化粧を施し、美しくいたい女性の気持ちを支援している。 夏祭りには、浴衣で参加など気分転換の支援を実施している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	調理準備～後片付け迄を食事として考え、各々の力に添った役割を持ちながら調理や配膳、下膳、後片付けの作業を職員と共にしている。 気分転換にテラスなど場所を変えて食事を楽しむこともある。	業者の献立・食材を用いて利用者と一緒に調理し、配膳・下膳・後片付けも一緒にしている。様々なおやつを一緒に作り、弁当を取り寄せ、ガレージでの焼き肉やオンラインツアーに因んだ物（お伊勢参りの松坂牛すき焼き、花見の桜餅）を楽しんでいる。秋祭りの打ち上げパーティーや、行事賞金を使った贅沢な食事も楽しんでいる。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事・水分摂取状況を記録し、個別のバランスについて把握に努めている。 最期まで『食べる楽しみ』が維持できる様に支援している。 好みの温度や食べやすさなど、状況に合わせて提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の歯磨き誘導・口腔ケア実施、毎晩の洗浄を促し支援を行なっている。 義歯管理の仕方を個々の有する力に合わせ支援している。 歯科医との連携、口の中の健康と食事の楽しみに繋げている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄のリズムやパターンを探るため、排泄チェック表を付け、個々のリズム把握に努めている。 尊厳を保つ為、個々のリズムに基づき支援を行い、トイレでの排泄が維持できる様に支援している。	「職員が介入せずに、自分の力で辱めが無く排泄する」ことを自立と捉え、利用者個々の排泄パターンやサイン（ソワソワする、トイレを探す）を察知して適時にトイレに誘導している。 夜間は2時間置きに巡回し、個々の状況に応じてトイレ誘導・パッド交換やポータブルトイレの処理を行っている。入居後には、排泄の認識力が高まる人が多い。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便の量、形状と日頃の食事・水分摂取量、運動量、体調を比較し働きかけ。 オリゴ糖、牛乳、バナナやヨーグルトの食品、ホットパックやマッサージの実施なども取り入れ自然排便を促している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	定期的な入浴の予定は立てているが、時間や順番の希望を最優先し、個々のスタイルを保つ為の要望を柔軟に取り入れている。 入居者同士誘い合って一緒に入ったり、銭湯の楽しみも支援している。	週2回の午前・午後の入浴を基本とし、3～4回や毎日の入浴利用者も支援している。嫌がる人は日や職員を替え、姉妹や仲良しと一緒に入る人もいる。重度の人は職員2人で介助し、有料の訪問入浴を利用する人もいる。毎回湯を替えて清潔を保ち、柚子湯や好みのシャンプー・石鹸・化粧水を利用して入浴を楽しんでもらっている。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々の生活習慣を尊重し、日中活動とのメリハリをつけて休息できるよう配慮している。 自室だけでなく、居間においてもリクライニングチェアで足を伸ばしてうたた寝ができる環境作りをしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬剤師からの指導の機会があり、個々の処方の薬情をファイル化し、理解と共有に努めている。 与薬の際、分包記載されている名前と日時を声を出し、本人確認することを徹底し、誤薬防止している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	犬との散歩、車での遠出外出、個々の趣味・気分転換法の取り入れ。 家族との繋がりや先祖供養など、本人が心の支えとする役割の維持。 個々の得意な事で力を発揮できるよう支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍において、気軽に外出できる機会を失っているが、洗濯物やテラスでのティタイムなど日常的に外気に触れる機会は多い。 家族との面会はテラスにて外気にあたりながら実施を続けている。	コロナ禍の中でも、人の少ない事業所傍の川沿いを散歩し、近くの神社での初詣や公園での花見に出かけ、車3台で緑地にも行った。重度の人も洗濯物干しや2Fルーフバルコニーでのティタイムなどで外気に触れている。昨年は2回オンラインツアーを実施し、ガイドと会話して臨場感を味わってもらった。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	理解力に応じて現金を自身で管理・支出計算を日記に付けるなど支援している。 買い物で実際にお金を使うことで、社会貢献と自信維持に繋がる、個々の持ち続けた能力を支援している。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話の利用、管理の支援。 ビデオ通話など状況に応じて対応している。 季節の便りを、写真付きハガキを一緒に作成し、ご自身でメッセージを加えていただき完成させ送れる様に支援をしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	洗濯物を干すことで太陽を感じ、雨空を見極めて洗濯物を取り込むなど、時の移りが感じれる日常がある。 季節ごとのイベントの工夫。 適正な空調管理、感染予防対策、居心地良さに配慮している。	食堂と区分けしたリビングでは、テレビ前に「コ」の字型に置かれたソファーでゆったり過ごせる。空気清浄機・加湿器・サーキュレーターを設置し清潔を保っている。トイレは消臭スプレーで消臭し、排泄物は素早く処理して臭わないよう留意している。安全確保のため、導線やキッチンの上に物を置かず、手摺りに物を掛けないよう気を付けている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	憩いの場所が苑内に数か所あり、入居者同士が憩う様子も日常的。 皆から離れて一人でもゆっくり出来るソファや長椅子が配置してある。 自由にテラスやベランダに出て、日向ぼっこや運動ができる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れた家具や寝具、日用品を持ち込んで頂いている。 馴染みの物に囲まれる事で、ご自身の居場所として安心して頂いている。 レイアウトもご本人と相談し、いつでも変更できるようにしている。	居室には、クローゼット（又はタンス）と電動ベッド（事業所で貸し出し）・エアコン・換気扇・カーテンを設置している。利用者は、テレビ・タンス・ラック・机・加湿器・仏壇などを自由に持ち込み、高い家具には転倒防止棒を設置して安全を確保している。家族の月命日に、仏壇に花・おやつ・ご飯を供える利用者を支援している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	記憶の混乱が見られた場合、問題点に着目し、即、解決できる支援を勘案している。 場所の迷いなどは、わかり易く表示するなど工夫を施している。 常に動線の確保と安全な環境整備に努めている。		